

小児科この一年

小児科医長 矢野 公一

診療体制

平成11年1月から3月までは前年から引き続き瀧本副院長、境野医長、大島医員、吉澤医員の4人体制で診療にあたりました。4月から境野医長は稚内市立病院、吉澤医員は富良野協会病院にそれぞれ赴任しました。境野医長の後任として矢野が旭川医大から、吉澤医員の後任として岡本医員が旭川厚生病院から着任いたしました。

一般外来は、毎日午前・午後とも2診体制で行い、込み合うときは3診としています。午前は瀧本、境野/矢野、午後は瀧本、境野/矢野、大島、岡本が担当しました。午後は予防接種も行い、1ヶ月検診は主に大島、吉澤/岡本が担当いたしました。専門外来は、旭川医大小児科より出張していただき、神経・発達外来（沖助教授、宮本講師）、内分泌外来（伊藤助手）、心臓外来（津田助手）を1～2ヶ月に1回程度行っています。病棟診療は、主に大島、吉澤/岡本が担当しました。院外業務は、乳幼児検診を瀧本、矢野、中川町のサテライト診療を瀧本が担当しました。また、年末・年始には休日外来を行いました。

外 来

外来患者数は、平成11年11月現在で一日平均113人であり前年とほぼ同等の患者数であります。1、2月にはインフルエンザの流行がありました。3月下旬から4月中旬にかけて乾燥イカ菓子による全国的なサルモネラ食中毒が名寄でも発生し、2～11歳の計9人の便からSalmonella Oranienburg, Salmonella Chesterのいずれかが検出されました（岡本、大島が学会報告）。さらに、本来は冬季に集中するロタウイルス胃腸炎が4月を過ぎても見られました。また、中耳炎を合併する上気道炎患者が多くみられ、耳鼻科の先生には大変お世話になっております。

外来において特筆すべきは、向かいの部屋を小児科の点滴室として使えるようになり、待合いソファで点滴をする状況が改善されたことであります。さらに、待合いに子供達がすわって遊べるスペースを作っていただきました。外来が込み合うと2時間待ちになることもあり、患者さんにはこのスペースで絵本を見ながら少しでも快適に待ち時間を過ごしていただきたいと思っております。また、第2診察室はカーテンのみで囲われていましたが、パーティションを設置し患者さんのプライバシーを確保するのに役立っています。関係各位のご尽力に感謝いたします。なお、絵本は産婦人科川村先生はじめいろいろな方から寄贈していただいております。

外来が一日200人近くなるとカルテ整理を含め外来終了が遅くなり外来看護婦の皆さん、緊急検査をして下さっている検査科の皆さん、医事課の皆さんも終業が遅くなってしまいます。また、救急外来では小児科の患者さんが当直の皆様方にお世話になっております。この場を借りてお礼申し上げます。

病 棟

入院患者数はのべ812人（一般小児720人、新生児92人）でありました。このうち市内在住患者が一般小児は466人（64%）、新生児は24人（26%）、と市外からの患者が多くみられました。一般小児のうち呼吸器疾患、消化器疾患は487人（68%）でありました。新生児では、低出生体重児は20名、呼吸窮迫症候群が1名でありました。死亡退院は3名でありました。特記すべきは、副鼻腔炎、眼窩蜂巣炎を合併した脳硬膜下膿瘍の男児例を内科的治療で治癒することができたことであります（大島が学会報告）。また、初回の腹痛発作で診断し得た先天性胆道拡張症を経験いたし

ました（岡本が学会報告）。その他、ポリープを伴う腸重積症（岡本が学会報告予定）、先天性小腸閉鎖症、蛋白漏出性胃腸症を主症状とした天疱瘡、上顎腫瘤と皮膚症状で発症した Histiocytosis X、腎炎で発症した SLE、インフルエンザ菌による髄膜炎など貴重な症例を経験することができました。各科の諸先生の御協力に感謝いたします。

小児科は、新生児室を含め 15 床のベッドでやりくりしております。小児科はほとんどが急性疾患であります。このため肺炎、インフルエンザなどで入院が多くなる時期は、入院が必要な患者さんにしばらく外来で待っていただき、少しでも良くなった入院患者さんを早めに退院としてベッドを作っています。病棟担当医、看護スタッフは慌ただしい日々です。また、年間 448 名の分娩があり、入院扱いにはならない健康新生児の診察にも力を注いでいることをお伝えしたいと思います。

設備関係で特筆すべきは、新生児室での「手洗い」が完備し新生児室での感染予防が充実したことです。関係各位のご尽力に感謝いたします。また、岡本が中心となり退院時要約のコンピュータ入力を開始しました。今後の患者統計等に役立てていこうと考えております。

カンファレンスなど

月 1 回、産婦人科、病棟婦長、小児科でのハイリスク妊娠カンファレンスがあり、産科・小児科の連携を緊密なものとしております。また、外来および病棟看護スタッフとのミーティングを行い、より良い小児医療をめざしております。医事課の国沢さんには、小児科関連の管理料、再診料など

について詳細な資料を作成していただき、外来スタッフとの勉強会をしていただきました。さらに、市立土別総合病院小児科とは合同の抄読会を毎月継続して行い、その後の飲み会では情報交換を行い密接な関係を維持しております。

研究活動

学会発表としては吉澤が、新生児室の MRSA 感染症、大島が、前年度の症例であるパラチフスの幼児例、サルモネラ食中毒、脳膿瘍の男児例を、岡本がサルモネラ食中毒、総胆管拡張症を全国学会あるいは地方会で報告しました。また、大島はパラチフス例を、矢野は思春期早発症の診断を論文にまとめました。なお、12 月には大島が旭川医大小児科で学位を取得しました。忙しい病院勤務の中で学位論文をまとめたことに敬意を表します。今後も、小児科から学会発表、論文報告を積極的に行っていきたいと考えております。

まとめ

当院小児科は、病棟患者統計を見ても明らかのように、名寄市内のみならず美深、中川、幌延、枝幸、西興部など広い地域から患者さんが受診しています。名寄から稚内までの間にほとんど小児科医がいない現状で当科の重要性をひしひしと感じております。少子高齢化の時代の波の中で、あすの日本を担っていく子供達が健康に育っていけるように医療の面から貢献していきたいと思っております。還暦を迎え益々お元気な瀧本副院長のもと、医師・看護婦が一丸となって小児医療に邁進していく所存であります。今後とも皆様の御協力をお願い申し上げます。

